

---

# EXSERION:LOSTCHAOS

コアス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

EXSERION：LOSTCHAOS

### 【Nコード】

N7473M

### 【作者名】

コアス

### 【あらすじ】

心の闇を力に変えるノヴェインマインダーの紅月暁は幼馴染と共に悪霊退治に明け暮れていた。ある日深夜学園の地下でエクセリオンシリーズの機体を発見したことにより物語は動き出す。

Episode 1「VEREARーヴィジョンエラー（超機動）」

（深夜の学園内地下室にて）

「グワン！」

「ツツキー、そっちにいったよ」

「この姿の時はカオスと呼べよエリアス」

おつと俺は紅月 暁あかつき×2 孤神学園高等部一年。裏の顔はこの力、ノヴェインマインダーの力を使って悪霊退治屋を生業としているカオス・ノヴェインだ。

「ハイハイ、ツツキー」

「お前な・・・」

そして彼女は俺の幼馴染である桜乃夢雪。同じノヴェインマインダーでもあるエリアス・ノヴェインだ。

「マスター、まだくるようです！結果！」

「術開封！」

コイツ等は心の住人、ノヴェインだ。マインダーの力を与えてくれた。

「それじゃ、いつくよおー！「アーク・ブレイン」！！」

「カオスダークフレイム」！！」

ザンツ！ザシュツ！ズドン！

「グルル・・・」

「フー、浄化完了」

仮面を外し元の姿に戻る。

「ツツキー、おっつかれえー」

「ああ、桜野先帰っていいぞ。俺は調査したい場所があるんでな」

「そうなの・・・じゃ私帰るね・・・」

桜乃と別れ、俺は調査の為に更に奥に進んでいった。そこで・・・  
「なんだ・・・コレは!!!?」

地下室3Fにピー（想像で補ってください）程の大きさのロボットがあった。

「コレは！まさか！」

隣でノヴェインが俺以上に驚愕していた。

「ノヴェイン知っているのか！？」

「知ってるもなにもこれは戦争時代に我々ノヴェインマインダー専用極秘に開発された「EXSERION」シリーズの一機、カオスロストエクセリオン……！」

「なん……だと……！！……？？？まだこんな力が」

「今まで発見されなかったのだが……だがなぜこんな所に？」

「考えるのは後にするべきじゃないか。とにかく搭乗してみるしかないな」

「おお……」

それで搭乗してみたまではよかったのだが……。

「なんなんだよ！？あの黒くて丸い未確認物体は！？」

「推測した。アレは多分だが機動のブロックプログラムではないか？」

「最初の喚問ってことかよ」

「その台座盤にお前の「混沌の鉦」を刺してみる」

「おう」

鉦がカオスロストエクセリオンの手に転送される。

「術を貼るからその間に外に出るココじゃあれだ」

「ああ、分かってる」

だが外に脱出してもものの4秒で……バリーン！

「ぐわはあ……」

「ノヴェイン！」

「く……無念……」

「早く戻れ！」

ノヴェインの術をいとも簡単に解し学園地下室を吹っ飛ばしたなんて奴なんだ。

「所詮プログラムと甘くみてなめてかかって簡単な術を開封したなかりに……」

「オイお前な……」

心配した俺が馬鹿だった。

「カオスダークフレイム」！！！」

シュボボ！

「どうだ？……」

「……ピピピ第二段階二入りマス」

「んげげっ！ほとんど効いてねえ」

その時……ドクン！……なんだ！？どうしたっていうんだ！？

鼓動が……ドクン！

「ウオオー！おお！」

「！おお！」

「超機動！！」「エクセリオンパワー・ダークシステム」開放！！」

カオスロストエクセリオンが紫に染まっていく。そうこれこそが。

「誤った闇と光を断つ闇となる。カオスロストパワー・ダークサ

インエクセリオン！」

「ピピピ、危険危険」

「逃がすか！」「カオスダークフレイマーサインザンバー Slash」

！！」

シュボボ！ザザン！

「……」

「終わったか……」

俺は……これからまた始まる、色んな意味で、序章を知ったのだ。  
つた。

続

Episodes?」「プログラマ」前編(前書き)

2 話目投稿です。

## Episode? 「ロードア」(前編)

激しかったのか?」戦闘から一夜明け……。

「ああああー……! しまった忘れてたあー!」

お分かりであろう。俺達のミスによつて昨晚地下といえども校舎を吹き飛ばしてしまったもんだから早朝から警察の捜査がきて大騒動になっていた。

「ねえ、ツツキーアンタ昨日一体なにやらかしたのよ? 警察が来てるなんて」

「いやあさーええつと……これには超深すぎる理由がありましたですね……」

そんでさっそく桜乃に追い討ちの尋問をかけられた。

「スマン、我のミスだ」

「エリアスウーちよつとこつちへきなさいな」

「マスターが怖いんですけど……」

「諦める」

桜乃の黒い笑みがノヴェインまでもを震え上がらせる。

「なにか隠してる事あるんじゃない?」

「なんのことでしょうか?」

「エリアス、実は「EXSERION」シリーズの1機を見つけた」

「なんですつて!!?? アレが……」

「どういう事なのよ!?!」

エリアスと桜乃の驚愕が響き渡る。

「すいませんマスター! アレが現代にあるとは把握できなかったの……」

「エリアス謝るのは後よ。私も探しに行ってくるわ!」

「へっ!? 何処に?」

「アメリカ。あと周辺の外国かな」

「あるとは限らないぞ」

「いやいやそついう問題じゃないだろ！お前どうやって行く気だ。」  
「学園長には長期家族旅行っていうわよとにかく今から行ってくるから」

「お・・オイー！？」

俺の心配をよそに桜乃は行ってしまった。

夕方、街の大通りにて

「なんかまたきやがったあー！？」  
また

「呼ぶしかないぞ」

「でもこんな街中で・・・」

「あのサイズなら大丈夫なはずだ」

「ええーい！もうどうにでもなれや。超機動！カオスロストダーク  
サインエクセリオン！」

ブウン！

「もう一気に片付ける！パワード（以下略）「ダークフレイムスラ  
ツシュ」！」

「ギガ！」

「ヤベ！」

その時信じられない事態が起きた。

後編へ続



Episode?」ロードア」前編」(後書き)

怒涛の前後編です！次回予告後編新たな美少女出現！主人公の周りは超修羅場となっていく！お楽しみに！

Mathsosaer「？」「——」「？」「？」 {中編} (前書き)

中編です！

Episode?」「ロード「ア」」中編」

「プログラムキドウ！」

「チュン！x2」

「ウワワワツ！?このドちくしょう・・・！ほとんど攻撃効いてないじゃないか！」

いくら異次元空間を操るノヴェインマインダーの特殊機体でもデジタルの攻撃は喰らってしまう。だから俺自身にもダメージがいく。

「クソツ！どうすればいいんだよ!？」

もうどうしようもないのか・・・大量の出血をこらえながら必死に打開策を探すがもうなにもしようがない。その時だった・・・。ドツクン!!!

「!?!?なに!?!この感じは!?!?まさか・・・！ノヴェイン！」

「ああ、確かに我もさき程から強い力を感じる！まさにこれは！・・・！来たようだぞ！」

「コード・コアキューブセット・・・」

どこからともなく声が響く。

「別のノヴェインマインダーがいる！」

「さあ、目覚めなさい・・・この私、エールスノヴェインが告げる。

・・・超機動!!!ライジングロードエクセリオン！」

「なっ!?!？」

「おお!・・・なんと美しい・・・」

俺もノヴェインもその輝きに呆気にとられる。

「一体あの子は・・・」

「ピピ!?!ハイジヨタイシヨウゾウカヲカクニン！ウチマス」

チュドン！すぐに謎のプログラムも攻撃態勢に入る。

「コード・コアキューブシンク口覚醒！ライジングサインシステム超解放!!!」「ライジング・デモリッションブレイク」!!!」

「ピガー!・・・・・・・・」

そのエクセリオンから放たれた地を砕く雷光はプログラムを跡形もなく打ち砕いた。そして・・・

変身をといた彼女は降りてきて近付いてきた。

「ふうん・・・君が「混沌」と「闇」の称号を持ちしマインダーね。」

「うわ・・・」

彼女を見て思わず顔を隠す。

「なに顔を赤らめてんのよ？」

「そりやなりますよ。凄く可愛い美少女が目の前にいるんだから・・・。」

「もしかしていやらしいこと考えてない？」

「！それは・・・」

慌ててそっぽを向く。

「考えてたわね？」

「いえ・・・」

「まあ、いいわ。今から私の家に来なさい」

「ハイ？・・・！？」

「あのプログラムがなんなのか知りたいでしょう？」

「それはそうだが・・・」

なぜご招待！？まあこれは次の話で

## Episode?」ロードコア」の中編（後書き）

次回予告なんかわけの分からないフラグが立ったとか立たなかったりとか。そしてプログラムの正体とは？後編へ続く  
多くの感想お待ちしています。

Episode?」「」「」後編(前書)

後編

Episode?」「ロード」「後編」

「……」

あの謎のプログラムの正体を知っていると聞いた謎の美少女マインダーの家へのご招待されたのだが……。

凄い大豪邸……。

「はあ……」

「お嬢はまだ帰ってきてませんで」

執事だと思っただろうっゝいることはいるが、今喋ったのは一匹の猫だ。そしてなぜか大阪弁……。

「まさか猫又とはな」

「ワイはリオトや」

「あの子は？」

「ソニヤー、買い物に行ってる」

「ただいま」

「！」

「アラ、来たのね……」

「俺は紅月暁。」

「なにその変な名前……」

「う……」

名前の変さを指摘されだめる。

「まあいいですわ……。私はリティーナ・Mハメメル、ハートリックレイン。父がイギリス人、母が日本人ですわ」

「それで……あの事を教えてもらえるか」

「なら私についてきなさい」

そういわれ連れていかれたのは地下室の大規模な大型シエルターへと案内された。

「ここは……」

「見て分からない？親類に頼んで作ってもらったエクセリオン専用

のデータベースの格納庫ですわよ」

「あ！あれは・・・」

あの時の光景が蘇る。

「そう、私エールスノヴェインのライジングロードエクセリオン。

説明するわね。あのプログラムはおそらくなにかしらの陰謀があると推測できますわ。名称は「BLACKLOSTEDEN」

「俺達ノヴェインマインダー、そしてエクセリオンにも攻撃が通ってしまっデジタルチートプログラムってわけか」

「詳細は今の所これだけよ。それでツキ」

「ん？」

また変なアダ名を付けられた・・・。

「あなたの「混沌」、「闇」のコードコアキューブを一時預かりたいの。データベースにインプットさせるから」

「なんだソレ？」

「はい？」

「そんなもの持ってないけど」

「なんですって！？ではどうしてあなたのエクセリオンはコードコアキューブ無しで力を発動できるっていうのです！？納得のいく説明をしてくださいな！」

「それは、俺自身の力を注いで・・・」

先輩が驚愕している。

「ありえませんか。コードコアキューブを経由せずに力を発動できるなんて・・・」

「・・・あの先輩？」

「・・・これはまたとないチャンスなのかもしれないですわ！謎を解き明かせるかもしれない・・・ツキ、あなたの力がもっと知りたくなってまいりましたわ！」

「へッ！？・・・」

「そうとなったらあなたのエクセリオンもココへおきなさい。ほら私と一緒に住もうですわ！」



「ななな・・・なんですとおー!!!!?」  
「なんだこのわけわからんフラグは!!!!?」

Episode?」ロードア」後編」後書き

次回暁、色々な意味で暁に死す！(仮)

Episode? 「超空間」 〔前編〕 (前書き)

うわー！我が世の夏がきたあー！

Episode? 「超空間」(前編)

「…………ふ…ふっわあー…………うー…………ん…………!!  
??」

朝起きてみると先輩がいた。なぜこうなった!? 昨日をよおく思い出して今の事態を整理してみよう。昨晚話を聞かされ、先輩に同居を提案されて荷物を取りに帰ろうとしたのだが先輩は強引に「今日はもう遅いから明日になさい!」とか言っただけで俺を自室に引きずり連れ込まれたんだ。先輩に俺個人の部屋は? と一応聞いてみたが「まだ用意できていないんですわ」と言われ一緒に寝たんだ……。

「うわわあー!!…………」

先輩のほのかな香りに誘われてついつい……

「!!!!???ブツ!う…………」

布団をめくると先輩は上下着を着てなかった。鼻血を抑えながら息を潜める。いつておくが俺が脱がしたんじゃないぞ。

「暑い…………ですわ…………」

まさか暑いからって無意識に脱いだんですかこの人!?

「…………ん?…………おはよう…………ですわ…………ハッ!」

「んげっ!…………」

「え…………い…………」

先輩は当然のように自分の格好を見る。

「先輩ちよつと落ち着いて話を…………」

「いやあー!!」

「ひいー!」

それから…………

「あの、先輩?俺じゃありませんからね」

「分かっていますわ。でも…………」

「すいません…………ごめんなさい…………」

「もう……」

「で……では俺は荷物取ってきますね」とりあえず急いでその場から離脱。

「はあ……なんてこった……。桜乃にバレたらエライことになるところだぜ。ん？エアメール？一体誰から……うお!？」

この話はまた次回

Episode? 「超空間」 「前編」 (後書き)

次回ハーレム形成! 「かも」

Episode?」超空間」〔後編〕(前書き)

後編!

Episode? 「超空間」(後編)

「まさか・・・！」

家に届いた手紙を見て驚く。桜乃からの報告メールかと思われたが違った。

「帰ってくるのか・・・本当に」

なんと俺の義姉妹の二人が長期アメリカ留学を終えたので帰ってくるというのだ。

「う・・・でも・・・」

今の状況をどう説明すればいいんだ？とりあえず返事は送つといた。「そうですね・・・」

俺は屋敷に急いで戻り同居を断ろうとしたが、先輩の残念そうな顔を見たら断れなかった。でも今朝のようなことがあつたら俺の身が色んな意味で持たない。

「でも先輩は単に俺を実験台にしたいだけじゃないんですか？」

「・・・それは・・・」

「ほらそうじゃないんですか！？これなら桜乃の方がまだマシと・・・」

「・・・バカ・・・」

「えっ！？・・・ちよつと先輩！？」

「もういいですわ！」

彼女は涙を浮かべ出ていってしまった。

「あーあ泣かした泣かした」

「うつせえー！・・・なんなんだよつたく・・・！後はもう知らねえぞ」

「・・・リテイナーSide」

「・・・ツキのバカ・・・」

「お嬢様、敵襲です！」

「もうこれからずっと一人ぼっちなの・・・？」



「お嬢様！」

「・・・変身・・・超機動・・・」

「その頃の俺はというと」

「ウー！屋敷中にサイレンが突然鳴り響いた。

「なんだ！？」

「警報や！ご主人が戦っているんや！でも警戒レベルを超えている・  
・危ないんや！」

「どうやら敵襲のようだな。早く行くぞ」

「いや・・・俺は・・・」

俺は戸惑ってしまふ。先輩を助けることに。

「どうした？カオス！？」

「ご主人を助けてくれニヤ！」

「カオス・・・主は大切な者を守る為に我ノヴェインマインダーの  
力を得られたのではないのか！」

「そうだ・・・俺は・・・うああー！」

ノヴェインの一言で目が覚めた。

「先輩・・・今すぐ援護にいきます！・・・」

「市街地にて」

「クツ！・・・」

「お嬢様！？くうつ・・・敵が今までのより桁違いに強い・・・」

「ターゲットカクニン！」

ピンッ！

「しまっ・・・」

ドーン！

「街が・・・」

「先輩ごめんなさい！」

「えっ！？・・・ツキなんで・・・来てくれたんですの？・・・こ  
んな今の私放っておいても・・・」

「先輩・・・それでも俺は貴方を守りますから！」

「ツキ・・・貴方って・・・」

「超機動！！！」

「気をつけて！そいつ今までのと違う！ビームに注意して」

「おおー！」「エクセリオンパワーダークサインシステム」！！」

「最大出力ターゲットロックオン！」

プログラムは出力最大のビームで攻撃してくるがすかさずダークサインシールドでガードした。

「どうしたどうしたどうしたあー！このネタ分かる人ー！」それだけか？なら・・・「ダークカオスサインシールドブーメランティングシューティング」！！！」

「ビガー！！！！」

ターゲットにダークサインシールドをブーメランのごとく投げつける。そして沈黙・・・。

「先輩！！！！」

「ツキ・・・もうほんつとに世話が焼けますわね・・・」

「それはどうか」

俺達は再び笑い合えた。

Episode? 「超空間」 〔後編〕 (後書き)

ふうー・・・やっとロボットラブな展開になってきましたね。さて次回、またまた暁、暁に死すゝかも

Episode? 「大波乱」 (前書き)

やっとういちゃう!

## Episode? 「大波乱」

「……………」

先輩と仲直りできてよかった。そして今日は先輩が学園に転入、俺の義姉妹達が帰国してくる。

「私学園長にご挨拶してきますわ」

そう言っ先輩は先に行った。

「それにしても……………」

溜息をつきながらTVニュースを観ていると…………

「昨日午後市街地で巨大ロボと黒い謎の物体の戦闘でビルが崩れました。」

「そりゃそうだよな」

俺達マインダーの姿は見えなくともロボであるエクセリオンの姿は見えてしまうからな。

「俺も行くか」

「2年E組教室付近渡り廊下」

「うおっ!?!」

先輩の入るクラスに全校約7割がたのモテない男子が先輩を一目見ようと目をこわばらせ今か今かと押しかけて騒がしくなっていた。

「コラー!男子教室に戻りなさい!」

「えー!?!ぜってえーやだ!モテない男の恨みを思い知れ!」

騒ぎを聞きつけた風紀委員の女子と先生達が怒鳴る。負けじと男子も抵抗反論する。ていうか俺が先輩と同居していることがコイツ等にバレたら…………かなりヤバイ…………。

「ほおう…………成程…………」

「うわおっ!?!滝野綺羅 teme 工どつから沸いてきた!?!てかまさか!?!……………」

「うむそのまさかだ。同志よ」

「お前は少し黙ってる!?!ていうか訴えるぞ!?!」

「フッフッフ！非公式新聞部を甘くみられては困るな俺の前ではプライベートなどないに等しい！おっと来たようだぞ」

「お！」

「おおおー！」

「男子いい加減にしろ！」

「先公は引つ込んでろよ！ていうかアンタも実は見たいんだろ？体育の山田」

「おっつ……」

凶星を突かれた山田に女子達はあきれれる。その後俺は滝野が流した爆弾写真と新聞のおかげで男子共に追われる羽目になってしまった。

「クソー！なんでこんな目に……滝野！」

「ひゅひゅー？」

完璧に楽しんでるなコイツ……。

「桜乃さんだけでは飽き足らずリティーナ先輩にまで毒牙にかけるとは！ハアハア……この桜乃さんへ他多数の美少女♡ファンクラブ会長葉木羅間つよしが天に変わって貴様を成敗してくれるわー！」  
どう見てもキモオタの眼鏡男が高らかに宣言する。

「ヒィー！？見てないで助ける滝野！」

「そろそろいいとするか」

パチン！

「ぬわっ！？なんだこれはモク煙！？ゴホゴホ……」

「逃げるなら今の内だぞ」

「えらい目にあつた……」

なんとか滝野があきてきて手助けしてくれたおかげで難を逃れることができた。

（放課後）

「よしいないな」

あのキモオタ野郎が率いる男子の警戒網をやつとこさ突破して空港へ急行した。

（空港エントランス）

「ココで待ち合わせだったよな」

「暁お兄ちゃん」

「ツキお兄様・・・」

懐かしい声が響き渡る。

「お帰り」

「ただいまだよ」

「お兄様お久しぶりです・・・」

俺の妹紅月由奈、美井香が戻ってきたのだ。

「それでツキお兄様・・・ある女性と同居してるっていつのは？」

「それはだな・・・」

経緯を説明した。

「それなら私達も見つけたよ」

「へっ!？」

「なに!？それは真か!？」

「本当だよほら!」

由奈のマイノーパソのデータを見る。

「おおっ・・・これはこれは・・・」

言い忘れたが彼女達もノヴェインマインダーである。俺が力を与えた。

「由奈ちゃんのメールフォースエクセリオンとみいのマジエルエクセリオンだよ。それよりお兄ちゃん早く帰ろうよ」

「ああ・・・そうだな・・・」

俺は本当にこの大切を守っていけるのだろうか。

Episode? 「大波乱」 (後書き)

いやはやいい展開になってきましたよね。

暁「そっすいや桜乃はいつ戻ってくるんだ？」

次回です。

暁「また俺は酷い目にあうのか!？」

頑張れ



Episode? 「大戦本気開幕! 六色んな意味でも」 (前書き)

はやく打ち終えたい・・・

Episode? 「大戦本気開幕! 色々な意味でも」

（翌日）

「うーん……?」

「お兄ちゃん朝だよ! ほら早く起きないと……」

「起きないと……なにするんだ? 美井香」

「……えつと……その……やっぱなんでもないよ……って起きてたの!? お兄ちゃん」

「いつもお前か由奈が交代で俺を起こしにきてただろ?」

「あつ覚えてたんだ……そんな小さい時のこと」

「しっかしお前も由奈も大きくなつたよなあ……」

「お兄ちゃん……どこ見てんの?」

「えつ/ノ/……えつとな……その……な……」

「お兄ちゃんのエツチ!」

「はいはい兄妹のイチャつきはそこまで学校早く行かないと遅刻しちゃうですわよ」

「リテイお姉ちゃん!? はう!」

「先輩!? 驚かさないで下さいよ」

突然先輩が背後にいたのでビックリしてしまった。

「ちゃんとノックはしましたわ……けどあんなことをしてるからいけないんですわ……」

「先輩妄想で捏造するのはやめてください! 汗」

「……」

（そして）

「ヒッ!?!?」

「同志紅月よ……」

学園でさっそく滝野に捕まる。

「な……なんでございましょうか?」

「お前に妹がいたとはな……初耳だぞ」

やっぱり！どつからそのことを！？まだ先生達にしか言っていないに。コイツに今まで黙ってたのは他でもないコイツが面白半分でリクしたら間違いなく非モテ男子共の逆恨みをもってリンチにされかねないからだ。だからバレないようにコイツを家にこさせたことはない！否！断じて！否！ハリアルド風に

「フツフツフ・・・紅月お前がどうあがこうとこの俺の情報網には到底敵うまい」

甘く見すぎていた・・・！そしてここは渡廊下当然他の生徒もいるわけで・・・。

「なんだとおー！！！！？？？」

「嘘だあー！！！！？？？あの美少女が憎き紅月暁の妹だなんてー！」

「それは真か！？越後屋よ！」

美少女ファン「以下略」会長もそこにいた。ていうかお前は悪大官か！お似合いだな！「満面の笑顔で」

「ヤバイ・・・」

「待ちやがれえー！！俺達の恨み思い知れえー！！！！？？？」

「そんな逆恨み知るかあー！！！」

）・・・）

「ぜーはあー・・・あんにやろう・・・」

滝野ぜつてえーいつかブチ殺す・・・。

なんとか追ってから逃げ切った俺は急いでしかし男子共に見つからないように教室へ。でも・・・

「あ！お兄ちゃんだおーい」

「お兄様・・・」

「えっ／＼／＼！？」

更なる追い討ちをかけられる。なんだって美井香達が俺のクラスでか学年に！？

「みい達アメリカ留学してたんだよ飛び級できて当然じゃん」

「そうか・・・ヒッ！！？」

背後から悪寒が・・・ひえー！！！！？？？。ゴキ！バキ！「なに

があつたかは想像で補つて下さい」

「お……お兄ちゃん大丈夫!？」

「お兄様!」

「あ……ああ……な……なんとか……」

ほとんど半殺しにされた俺を見て二人は……。

「お兄様をイジめる人覚悟してください!」

「まてまてなにする気だお前等!？」

「なにつてちよつとエクセリオンで……」（小声で）

「ワー!？もういいから!落ち着いてな!」

そして……

「はあ……疲れた……」

「あはは……大変だったねお兄ちゃん……」

「ん!？」

「どうしたノヴェイン?」

「エリアスが……帰ってきたようだ……」

「なに!？」

こんな急にか!?

「あつお兄様アレを見て!」

「おおつ!!なんともまた……」

「ただいま!ツツキー!」

「おまつ!こんな街中で降りんな!」

「大丈夫大丈夫よ……ん?げつ!？」

「アラ?あなたは確か……」

「あー!!!アンタイギリスでエクセリオン横取りしたあー!」

「なぬ!？」

どうやらこの二人は顔見知りになっていたようだ。

「横取りなんて心外ですわね。あなたが遅かつただけではないですか」

「それはそうとこれが私エリアスノヴェインのトリスティア・アークエクセリオンよ!」

「ババーン！ともいいたげな桜乃・・・おいおい。」

「それはそうとツッキー・・・話聞かせてもらいましょつか？」

「んげっ!?!」

「この女と同居してるってほんと!?!」

「どうしてそれを!?!」

「ツッキーの浮気者!?!」

「うわぁーん!」

Episode? 「大戦本気開幕! 色々な意味でも」 (後書き)

次回、新たな力に手にする!

Episode? 「次元のパーツ(前書き)」

もうすぐだ!

## Episode? 「次元のパーツ」

ドグッ!

「ウワツ!? こいつら・・・段々強くなってきたる!・・・」

「「閃光弾」!」

「お兄様強化を「メールコート」!」

「ありがとう!」

「「マジカルテイニングス・エクスペーション」!」

「「ライジング・デモリツショングレイヴ」!」

「「カオスダーククロスイグニツションフレイム」!」これでどう  
だあー!」

「・・・ガー!」

ズシャ!

「えっ!?・・・」

「私の「メールコート」で装甲を強化したはずのお兄様のエクセリ  
オンが・・・」

激痛が走る。機体の腕をもがれた。

「ぐぬああー!・・・」

「ツキ!?」

「ツッキー!」

「お兄ちゃん!?」

「お兄様!」

走馬灯が見えた・・・。

くそして・・・

「クソ!・・・」

まだ痛がする。次元治換でも追いつかないみたいだ。

「お兄様まだ動かないで下さい」

「・・・」

「・・・それであなたが未来から来たと」



「はいそうです」

未来人がきてた。俺達に世界を救ってもらうために。

「あれは裏政府軍がテロを起こすため作られたものなんです」

「政府が関わってたんですって!?!だから私の権力をもってしても調べられなかつたんですわ!」

「貴方方にこれを!」

「!?!これは・・・」

「僕達国家守護軍が急遽開発したエクセリオン専用強化パーツ、

「ギガギア」です。A1でも操作できます。まだこの1号機しか完成できていないのですが残された時間がないんです!」

「そして・・・ギガギア1号機は俺が扱うこととなつた」

「「ギガギア」、ドッキング!」

ガシャン!

「さあ!「カオスダークサインパワー・ギガギアシステム」超機動!」

「「トリスティアークシステム」・・・超機動!」

「「メールサインシステム」超機動!」

「「マジカルティアシステム」超機動!」

「「ライジングサインシステム」超開放!」

「ギギギ・・・」

ザン!

「いっけえー!」

ドゴーン!

「ギガギアのノヴェインマインダーはいずれ近いうちに現れますよ・

・・・」

「なに!?!」

「それではまた・・・」

Episode? 「次元のパーツ(後書き)」

超展開!

Episode? 「超真!」 (前書き)

力入ります!

Episode? 「超真!!」

「ギガギア一号機」を手に入れ超激戦から明けたある2日後の日のこと」

「zzzzz・・・」

「えっ・・・なによこれー!?・・・」

「夢雪お姉ちゃん一体どうしたの? そんな大声出して・・・ってえええー!!!???」

「ハッ!」

「お・・・お兄様・・・」

美井香の大声で目が覚めたのだが・・・

「あっ!・・・これはだな・・・そのな・・・」

すっかり忘れてた。昨日街に出かけたたらゴロツキ達に絡まれていた美少女がいた即急に助けた。もちろんノヴェインマインダーの力で、そしてその少女は記憶喪失だった。ユリシアという名前以外思い出せないらしかった。その子に「自分と同じニオイがする・・・」と言われ抱きつかれた。もしかして・・・仕方が無いので保護することにした。

「・・・ということだ分かってくれたか」

「危なかったあー・・・お兄ちゃんが・・・」

「待てい!いくらなんでもそんなことは・・・」

「なにかなあ?その間は?」

桜乃が鬼の形相で睨んでくる怖いです。

「ほほーう」

「うんげげっ!? 滝野テメエどっから沸いて出た!? というか不法侵入で訴えるぞ」

「ほおっ・・・それなら」

「ごめんなさい見逃します・・・というか先輩から聞いてないのかお前等?」

「うっん、なにも」

先輩にはなにか分かるかもしれないと思って言っておいたのだがあのマッドサイエンティスト……。

「まあ、ツッキーが他の女の子と付き合いおつが勝手だけど……」

「誤解すな！」

バン！

「ツキいるかしら？」

「おうなにか分かったのか？」

「興味深いですわ！その子のノヴェインマインダーの変身前後のハイパースペックそして加えての知力……間違いないですわ！この子ならあれを動かせられるんですわ！」

「えっー!?!？」

全員驚きを隠せない。

このカオスの俺でさえでも動不能だったギガギアをユリシアが!？

「……」

「と……とにかくこっちへきなさいですわユリシア」

「あっ……アカ……」

ユリシアは先輩に格納庫へ……

「フムフム……」

俺は誰を選ぶ!？

Episode? 「超真!」 (後書き)

超超展開!!

Episode 11「編入、そして・・・」  
〔前編〕（前書き）

おー！

Episode 11 「編入、そして・・・」 (前編)

「先輩の部屋」

「どうするの？」

「うん、確かにこのままじゃマズイね・・・」

「それもそうですわね」

「ほうほう・・・」

俺達へ滝野は明らかに高みの見物。は先輩の自室でユリシアを暁月ユリシアとして学園に編入させるべきか否かと議論していた。もしかないでも滝野の大馬鹿がリークしてあの会長陣にバレたら今度こそ俺の命は保障されない。ああ・・・悪寒がしてきた・・・。

「先輩のクラスに編入させられないんですか？」

「一応相談してみますわ。だけど・・・」

「友達の心配か？」

「そうなんですわ・・・。あの子を皆が受け入れてくれるかどうかそれが不安・・・」

先輩がユリシアを見て深い溜息をつく。確かに一般人には近寄りたくない存在へ男子を除いて。しかももしユリシアをよく思わない連中が出てきてイジメをしないと限らない。俺も同じ事を考え思っ

て少々心配だ・・・。

「アカ・・・」

ユリシアが不安そうに俺にすがりつく。

「大丈夫だユリシア。もし万が一お前に危険が及ぼうとするなら俺がかけて助けるさ。だからそう泣きそんな顔するんじゃないぞ」  
俺はユリシアの頭をそつと優しく撫でてやる。

「アカ・・・」

「ユリシア・・・」

「・・・はいそこでストップ！」

パン！



「ワワツ!?なにすんだよ桜乃」

「ツツキーなんて知らない!」

なにを怒ってんだよ桜乃……。

「なんとかお願いしときます!頼む!」

「なんとかやるだけはやってみますわね」

くそして学園にて……く

「無理でしたわ……私のクラスには……」

「そうか……」

「たとえできていたとしてもツキが傍にいないのではあの子を守れないですわ」

「できる限りやるしかないさ!」

そして俺は男子の襲撃にも耐えユリシアを守った。

だがある日事件は起きてしまった。

くある日の放課後く

「おいユリシアどこだー?……いない……」

先に帰ったのか?必ず待つておけとあれ程言っておいたのと思い帰ったが……。

「アレ!?いない……だと……!?先輩達ユリシア見なかったか?」

「えっ、見てないよ」

「みいも」

「私もです」

「そういえば見ていませんわね……もしかして……」

「まさか!?……ユリシア!」

俺は途端に不安になり忍び込んで学園中ユリシアを探し回った。無事できてくれ!しかし二時間探し続けたが見つからなかった。そして戻って……。

「はあはあ……一体どこにいったんだよ!?!」

「行き違いでしたのね……。ユリシアは戻ってきましたわ……ですけど……」

先輩は俺より暗い顔をしていた。

「ユリシア！」

「アカ……」

俺は後悔した。見るとユリシアは傷だらけであまりにも酷い状態だったのだ……。

続

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7473m/>

---

EXSERION:LOSTCHAOS

2010年10月19日07時51分発行